

日本的社會關係とゲマインシャフト

——ヴェーバーの日本封建論とその周辺——

野崎 敏郎

地域社会学の考察対象である「近隣」とは何か、また地域の人的結合を規定するモメントは何かについて、概念論的検討が加えられるることはこれまで必ずしも多くなかった。したがってまた、地域分析のためのカテゴリー論的な〈詰め〉は充分でないと思われる。地域結合には①自治的由来をもつものと②本質的に对外関係に規制されるものとの二つのモメントがある。後者にかんして、ヴェーバーは、日本人の生活様式の〈精神〉に固有の性格は「政治的・社会的構造の封建的性格によって生み出された」と述べている。この〈日本社会の封建的性格〉規定をがかりとしつつ、日本村落研究のヴェーバー的視座を明らかにし、その意義を探る。

第一に、天皇—将軍—大名—家臣の関係の評価をとりあげる。天皇の権威と将軍の権力との関連、誠実義務と従軍義務、幕府による大名の統制、大名による藩士の監督などについて考える。また主君—家臣関係については、「土地レーエン」（大名の蔵入地）と藩士の「単なる年貢アフリュンデ」（地方知行と感米知行）とのあいだの本質的差異が重要である。つまり①藩權力はレーエンではあるが、幕府権力によっていちじるしく弱められ、それへの従属性が強い。いっぽう藩士は、②地方知行形態でのあてがいを受けているならば、レーエン的性格が強いけれども、③漸次蔵米知行へと移行していくので、その場合はアフリュンデ制へと変質していくのである。

第二に、領主権力による村支配と農民層との関係について検討する。ヴェーバーは、貢租義務、耕地の割替、村落の閉鎖性、農民間格差、五人組制度、村の長の性格、村の長の上にいて裁判罰令権をもつ代官などのトピックを提示している。また日本的ゲーフェルシャフト（村請制）についても触れてみたい。

もちろん、ヴェーバーの概念をそのまま日本に「当てはめ」ることはできない。ここでは「石高」規定とブフリュンデの一般規定の見直しや、ハウスゲマインシャフト概念の限界について考察する。

第三に、日本人のメンタリティと近代化にかんするヴェーバー的展望をみる。維新以前から、日本のレーエン制はブフリュンデ制的に変形させていたので、レーエン的名誉観念は決定的に弱められていた。ブフリュンデ化の進行した特殊なレーエン制が、近代における官僚制化の急速な進展を準備し、可能にしたのである。

日本人は自力で合理的な経済倫理に達することはできなかつたが、契約的法関係を設定する没収可能なレーエン関係は、西洋的意味での〈個人主義〉を育てるためには、中国よりも有利な地盤を提供した。日本は、外国から資本主義を、人為的作品として比較的容易に採用することができた。ヴェーバーはこのように結論づけ、日本人のメンタリティにおける現世的性格や資本主義〈移植〉のために有利な社会条件を封建制のもとにみいだしたのである。

最後に、川島武宣氏らの論稿にも触れながら、ブフリュンデ的社會關係とレーエン的社會關係とがそれぞれ日本の近代化におよぼした独特の規定力をひとつひとつみきわめることによって、ヴェーバー的日本理解を再検討し深化させたい。

ヴェーバーの立論にみられる史料的不備・曖昧さ・事実誤認を取り除き、論述の未整理・未熟な部分を整理補足していくならば、ヴェーバーはわれわれに、日本社会の特質を考究するさいの有力な手がかりを与えてくれるであろう。本報告は、ヴェーバーの日本封建制理解の洗い直しを中心しながら、ラートゲン・福田徳二・朝河貫一・ヒンツェら、ヴェーバーの周辺にいた学究とのかかわりに

も目を向け、ヴェーバー比較社会学による日本研究への基礎視角を確定させるための試みである。
(神戸大学大学院)